No. 167

ティーブレイク

Tea Break

吾妻橋近郊墨堤放浪の記

会員　三宅　正夫

旧東京市を北から南へ貫いて東京湾に注ぐ荒川の下流は隅田川または墨水（ボクスイ）と言われ「澄んだ川」を意味する。その両岸が墨堤（ボクテイ，江戸中期の幕府老中で賄賂政治の悪名高い田沼意次時代の小説「剣客商売」の「陽炎の男」の巻,「赤い富士」では単に「ドテ」と記されている)。その隅田川には吾妻橋，駒形橋等十数の橋が架っているが，吾妻橋より１つ上流にある「言問橋」には去る第２次大戦の爪痕が残つている。石の欄干に見られる黒い汚れは焼夷弾の炎で焼かれた痕。右岸橋詰めに千羽鶴で飾られて，黙然として建つ碑は両岸から橋に避難したのに，上から降り注ぐ焼夷弾で負傷したり，炎の熱さに耐え切れず川に飛込んで溺れたとか，この橋の近郊で亡くなった多数の市民を慰霊するもの。合掌。

櫻の名所として賑わう吾妻橋近くの堤の西側は浅草（台東区）で，浅草寺（センソウジ）を始め待乳山聖天宮（マツチヤマショウデングウ），山谷堀（サンヤボリ）等名所が多い。浅草寺については今更説明を加える必要もなかろうが，最近は人，人，人。中国語，韓国語，英語等が飛び交い外国語の渦，日本語は本人と連れ合いのみの感で殆ど聞こえてこない。チョット足を伸ばして寺の北側に接する言問通（コトトイドオリ）を越えて一本北の通りに，レスリングの応援で「気合いダ，気合いダ」と連呼する名物の浜口氏の道場がある。ドタンバタンの音は全く聞こえない。待乳山聖天宮は花柳界の信仰が厚いところで，そのシンボルマークは２本の二股大根が又状に交差しているという風変わりなもの。お供え用の生の大根も売られている。麓の案内板に，小説家池波正太郎氏がこの近くで生まれたと記してあるが，生家は見当たらない。山谷堀は行き交う猪牙舟で賑ったとのことであるが，現在は完全に埋め立てられて遊歩道（巾，約10m）となっている。上記の聖天宮の北を北西に延び，昔の堤に植えられていたと思われる桜並木と，今戸橋他の橋跡とが残っている。有名な「見返り柳」は南に一本隣るバス道路にあるが，大木と思いきや，植替えのためか，ひなびた幽霊のよう。

最近は人力車に乗って車夫の説明を聞き乍ら名所巡りをすることも出来る。浅草寺の「雷門」や「吾妻橋」右岸橋詰で，呼込みが煩い。

一方上記の堤の東側は向島（ムコウジマ，墨田区）で，墨東（ボクトウ）とも称される。吾妻橋際のビル屋上に置かれたきん斗雲様オブジェ越しに中空にそびえるスカイツリーは恰好の被写体。隅田川七福神，桜餅，団子が有名。上述の浅草のように外国人でゴッタ返していない。上記七福神は江戸文化年間に始まったもので，南から北へ順に三囲神社（ミメグリジンジャ），弘福寺，長命寺，百花園，白鬚神社，多聞寺の６箇所。１つ不足するが，三囲神社が恵比須，大国の２神を祀るため。三囲神社の前足を折ったライオン坐像は三越本店にあるものとそっくり。弘福寺は中国風の建築。多聞寺には村人を苦しめたという狸の穴がある。多聞寺の手前にある隅田川旧跡木母寺（モクボジ）に一寸道草。珍しく広野の独立建物。芸道上達の寺であり，また「尋ね来て　問はば応へよ都鳥　隅田川原の露と消へぬと」と歌われた謡曲「隅田川」中の人物梅若丸の舞台。

墨東と言えば，永井荷風の小説「墨東綺譚」。一寸遠いがその舞台となった「玉の井」に。「大正通り」沿いの交番で聞いても一箇所を除きその小説に画かれた昔日の俤は全くないと。その例外は啓運閣教会（墨田区墨田３ー６ー 14)。３台の自動車が優に入るような広いガレージのある建物の裏側が寺になっており，一寸表から判り辛い。白い塀に沿って家の壁側を奥に入ると赤い鳥居越し

に本堂が現れる。寺の壁に荷風自身が作った玉の井の地図の他，その近辺の様子を「・・・・左側に玉の井館という寄席があって浪花節語りの名を染めた幡が二三流立っている。その隣に常夜燈と書いた灯を両側に立て連ね斜に奥深く南妙法蓮華経の赤い提灯をつるした堂と満願稲荷と書いた祠があって法華堂の方からカチカチと木魚を叩く音が聞える」と。その寄席はないが，凡その近辺の風景は変らぬようだ。交通は東武伊勢崎線「東向島」駅が便利。